

RCC スクール

「#湯崎知事と語ってみた」

2024

とき 令和6年12月21日（土）

ところ 叡啓大学

目次頁

開会	2
自己紹介	2
ひろしまビジョン説明	4
意見交換①（「どうやったら、若者が『広島にいたい』と思える街になるのか」）	7
意見交換②（「A I についての取組や夢」）	11
閉会	27

開会

司 会： RCCスクール「#湯崎知事と語ってみた」supported by 田宮パーツ。ありがとうございます。今回も始まりました。「湯崎知事と語ってみた」supported by 田宮パーツ。今回も広島県の湯崎知事にお越しいただきました。湯崎知事、よろしくお願いします。

湯 崎 知 事： よろしく申し上げます。

司 会： さて、今回は高校生の皆さん、広島AI部に所属の皆さんにお越しいただいています。広島AI部なのですが、県内の高校生がAIを理解し、活用する力を身に付ける機会を産学官連携により提供する新たな部活として活動しているということです。

これ、知事、色々なところでもうAIというのは、結構明確に強調されていますけれども、これはどんな思いなんですか。

湯 崎 知 事： 今、生成AIがすごく注目されていますけれども、生成AIに限らず、AIとデータというのがもう世の中を全然変えていくものだと思うんですね。それをうまく取り入れて使うことが、次の時代の経済や産業や社会にもとても重要なことだというふうに思っています。

司 会： 皆さんも激しく賛同。

一 同： はい。

司 会： 今日はデータも駆使しながら発表していただきたいと思います。さて、この企画の趣旨なのですが、今の高校生がどんな夢を抱き、悩みを抱え、何を楽しんでいるかを知事と高校生が語り合うことで、色々な角度から広島の未来を考えます。

この企画は3年目。今回で7回目ということになります。司会をさせていただきますRCC中国放送のアナウンサー、坂上俊次です。よろしくお願いします。（拍手）ありがとうございます。

なお、この取組はRCCのアプリIRAWで、広島市にあります叡啓大学から配信しております。では、メンバーのお名前を自己紹介していただきたいと思います。

自己紹介

司 会： では、私の近く、馬場さんからお願いします。

馬 場： 広島大学附属福山高等学校の高2の馬場です。よろしくお願いします。

三 井： 広島工業大学高等学校のK-STEAM2年生の三井雫です。よろしくお願いします。

中 越： 広島工業大学高等学校K-STEAM類型2年の中越華音です。よろしくお願いします。

滑 裕貴： 広島井口高等学校の滑裕貴です。よろしくお願いします。

三 宅 彩乃： 広島井口高等学校の三宅彩乃です。本日はよろしくお願いします。

森 松 愛琳： 庄原格致高等学校の森松愛琳です。お願いします。

前 壱 狼太郎： 庄原格致高等学校の前壱狼太郎です。よろしくお願いします。

司 会： 本来ですと、次の段取りにいくところなのですが、知事、今日はお二人からうれしい報告があるということで、まず工大高の三井さん。うれしい報告があるということで、みんなで聞きましょう。お願いします。

三 井 彩乃： うれしい報告。私は、柔道部やっているんですけど、先週の15日に白帯から黒帯に昇段することができました。

司 会： おめでとうございます。何か明日も。

三 井 彩乃： 今から姫路まで行って、明日の朝から夕方まで錬成会ということでずっと試合をやり続けます。

司 会： 文武両道で頑張ってください。

三 井 彩乃： はい。ありがとうございます。

司 会： そしてもう一人、井口高校の滑さんもうれしい報告があるということで、聞かせてください。

滑 裕貴： 先週の日曜日に早めのクリスマスプレゼントということで、親からガンダムのプラモデルを買ってもらってから、それが1週間足らずで形としては完成しました。

司 会： ガンダムのプラモデル。知事はプラモデルを作った思い出はありますか。

湯 崎 知 事： もちろん子供のころは作りましたが、ガンプラはまだなかったですね。

司 会： ガンプラはなかったですか。

湯 崎 知 事： ガンダムはまだない時代でしたから。単純に。

司 会： そうですね。今回すごい達成感があったということで、知事に実は冒頭聞きたいことがあるんですよ。

滑 裕貴： 達成感があったことって何かあるんですか。

司 会： ガンプラが達成感があったから、知事に達成感があったことを聞きたいと言っていたんです。

湯 崎 知 事： なるほど。起業した会社が上場したり、選挙で当選したり。

司 会： 人それぞれですね。そしてうれしい報告の後は、悩ましい報告も含めて、今日メンバーの中で唯一の生徒会長、中越さん。今日学校であったこと。

中 越 彩乃： 本日終業式で私は生徒会長として挨拶してきましたんですが、明日から冬休みに入るということで、冬休みは2週間しかないのに終わらない量の課題が各教科から出さ

れて、冬休みが休めないというのが悩ましいことですね。

司 会： 今、悩みと怒りをこちらにぶつけています。知事、抱え切れないほどの課題を抱えた高校生。何かアドバイスを。

湯崎知事： いやいや、それは先生の愛ですよ。愛のプレゼント。

司 会： 愛のプレゼント。これはプラスに考えたほうが。

湯崎知事： プラスです。プラス、プラス。今、何年生でしたっけ？

中 越： 2年生です。

湯崎知事： ほらほら、ほらね。3年生にそんなことをやると怒ったほうがいい。3年生は自分で色々やらなきゃいけないけど、2年生だったらちょっとそうやってもらったほうがしっかり勉強もできてね。

司 会： 知事に言われたら考え変わったでしょう。

中 越： そうですね。やっぱりクリスマスプレゼントとして、うれしく受け取ろうかなと思います。

司 会： 切り替え早いんですね。頑張ってください。

中 越： ありがとうございます。

司 会： では冒頭、湯崎知事から御挨拶と皆さんに情報提供ということで、湯崎知事、お願いします。

ひろしまビジョン説明

湯崎知事： 皆さん、改めてこんにちは。今日は土曜日で学校もあつたし、また姫路まで行かないといけないとか色々それぞれ忙しいんだと思いますけど、今日は参加いただいてありがとうございます。

今日は、どうやったら若者が広島にいたいと思えるかというテーマでこの会をやるということなんですけど、その前に広島の未来を語る上で、今、県がどんなことをしているのかというのを御説明させていただきたいと思います。

これですね。「安心▷誇り▷挑戦 ひろしまビジョン」という、これは広島県の10年後どうなっていきたいかというのを描いて、そのためにどうしようかという取組をまとめたものです。2021年につくったので、10年後といえば2030年ですね。今からだとあと5年ぐらいですか。皆さんも二十歳を超えてというようなタイミングじゃないかと思いますが、働いているかもしれないし、進学してまだ学校に行っているかもしれませんし、あるいはもう結婚しているかもしれません。色々な人生の転機を迎えるという、そういう時期じゃないかと思います。

そういう皆さんのこれからの将来、それから広島県の目指す姿。どうなんだろうというのを重ね合わせてみて、色々と考えていただければなというふうに思います。

広島が強みって色々あると思うんですけども、例えば今、広島県で「おいしい！広島」というキャンペーンをやっているんですけど、すぐに全国の人が思い浮かべるような広島のおいしいものって、例えばカキとかお好み焼きとかもみじまんじゅう。これは三大おいしいもの。プラス最近、レモンも入ってくるんですけど、そういうものもありますし、あるいは産業もたくさん、自動車産業を始めとして色々な産業がありますよね。

それから、広島や福山など大きな街がありますけれども、そのすぐそばにはすごく豊かな自然がある。これも広島に住んでいるとなかなか実感しないかもしれないですけど、東京に行ったりすると、例えば広島から車で1時間、北のほうに行くとすごい自然豊かなところじゃないですか。東京から車で1時間走っても、まだ東京なんですよ。この近さもすごく素晴らしいし、あとは平和とかチャレンジ精神というのも非常に大きなものがあるかなというふうに思っています。

そういう強みがあるんですけども、やはり色々な時代の環境というのもあります。どんどん変わっていきますし。「ひろしまビジョン」というのは、30年後に、一番右側を見てもらおうと、「概ね30年後」と小さな字で書いてありますけど、30年後にこういうふうになっている必要があるよねということを考えて、そこから、じゃあ10年後にはどうなっていないかやいけないかなど。その10年後の姿に今からどうしたらなれるだろうというのを描いたものなんですね。

この基本的な考え方としては、理念として、将来にわたって、「広島に生まれ、育ち、住み、働いて良かった」と心から思える広島県の実現ということで、皆さんは今のところ、生まれ、育ち、住んでいるわけですけども、将来、働いてもよかったというふうに思っているかなど。そのために何が必要かということなんです。そのために目指す姿として、県民の皆さん一人一人が安心して、そしてそのように誇りを持って夢や希望に挑戦していると、そんな状況をつくることができたかなというふうに考えています。

その目指す姿の実現に向けて、この中の一つ一つは、17の施策領域というのがあるんですけど、左の一番上からいくと、「子供・子育て」、「教育」、「健康」、「医療・介護」、「地域共生社会」というふうになっていますけど、こういう色々な分野。この分野で県民の皆さん一人一人の新しい挑戦というのを後押ししていきたいなというふうに思っていますし、こういったそれぞれの施策というのは独立しているわけじゃなくて、相互に関係しているんですよ。お互いがお互いに影響を与えているという側面がありますので、それをうまく連携させながら、連関させながら相乗効果を生みながら、こういった施策を進めていく。

その中でも、特に三つの視点というのを挙げています。DXの推進。DXって分かりますよね。デジタルトランスフォーメーション。AIとかはその中に入ってくるわけです。それからひろしまブランドの強化。ブランドを強くしていこう。それから人材育成というふうに設けていまして、総合的に取り組んでいます。

そういう中で、DXの中でも特にAIに力を入れているわけですね。「AIで未来を切り開く」ひろしま宣言というのをやって、この色々な取組を進めている、AI部はその一つということですね。AIというのは、まだまだ活用され始めて間もない。だから、皆さんがその最先端をいく可能性がとても高いということなんですよ。だから、もうずっと蓄積がある分野だと、もう僕らの年代や、あるいはもっと上の年代の人たちが、もう30年これをやっていますとか40年やっていますという人たちがいっぱいいるんですけど、AIというのはまだできたばかりなので、みんながトップに躍り出ることができる。そういうものだと思うんですね。

このAI、先ほどデータも大事だと言いましたけれども、AIとデータを色々な発展に使っていこうということなんですが、先ほどの色々な強みと、それからこれまで広島が進めてきた様々なことを掛け合わせて、そこにデジタルを入れて新しい発展を目指していこうというものです。広島には色々な強みがあるので、また、新しいことに挑戦しやすい環境というのもずっとつくってきているので、広島だからできることがたくさんあるんじゃないかなというふうに思っています。

必ずしもうまくいかなかったでもいい、失敗してもいいというところで、「ひろしまAIサンドボックス」というのもつくりました。AIサンドボックスというのは、AIを使って何か新しい課題解決のソリューションをつくっていこうというものです。これは、とにかくまだアイデアでもいいから、それを試してみて、失敗してもいいじゃんということで、サンドボックス。サンドボックスというのは砂場なので、砂場でお城をつくって、失敗したなと思ったら、またならして、またつくればいいじゃないですか。そういう実証をやるのがサンドボックスなんですね。

あとは、「広島AIラボ」というのは県庁の中につくって、AIってどんな使い方があるかなというのを県庁の中で考えるチームを5人ぐらいでつくろうというので進めています。

「ひろしまAI部」は、皆さんにやってもらっているということで、すごく期待をしているんですけども、こういう取組で広島がAIの活用の面をリードしていく。AI自体をつくるのはなかなか大変で、御存知のとおりオープンAIだとかグーグルとかそういう会社は何千億円とか何兆円というお金を使って開発していますけど、そこに我々は対抗しようとは思わない。できたものどう活用するかというのが一番大事なところで、それは我々ができる。皆さんはその最先端にいるということで、頑張ってもらいたいというふうに思っています。

若い力に大いに期待していて、こうやってみんなが広島の元気をブーストしてほしいなと思っています。よろしくお願いします。（拍手）

司 会： 皆さん、関心が高いですけど、特に森松さんはAIに関しては大分お話もさせてもらったんですが、今、知事からもこんな話がありましたけど、AIで未来はこう変わるんじゃないかなとか、何か期待するところとか、どんなことを今の話を聞いて思いましたか。

森 松： 自分が好きなものの中に音楽とか漫画とかアニメとかもあるんですけど、その中で今でもちょっとしたAIのようなものが技術的に使われているのがあったりして、

そういうのを見ていて、もっとすごい技術になったら、今でも人が描いているような細かい作業もAIになるのかなと期待はしています。

司 会： 後ほど発表の場に出てきますので、楽しみにしています。

意見交換①（「どうやったら、若者が『広島にいたい』と思える街になるのか」）

司 会： さて、これまでこの企画では、将来、広島に残りたいですか、出たいですかという議論をすることが多かったんですが、今回、一つ進めまして、「どうやったら、若者が『広島にいたい』と思える街になると思いますか」ということを皆さんに考えてもらいました。それぞれ発表してもらいたいと思います。まずは井口高校の滑さんから開けてください。前に見せてください。どうぞ。では、マイクを持ってもらって。どういったところですか、それは。

滑： 「何かしたいと思わせる」ということで、自分は呉に将来住んで、呉のどこかしの企業に就職して働きたいと思っています。でも、大体の人が広島から出るという選択をしているということは、広島県内ではやることがないとかしたいことがないという方が多いと思うので。自分だったら、広島というか呉で何かしたいという思いがあるから、こういうフリップにしました。

司 会： 滑さんは「呉愛」がずっとすごいですけど、どうしてこんなに呉に熱いんですか。

滑： 小学生のときに1回大和ミュージアムに行って、そこで、まず軍艦に興味深くなって、それ以降、大和ミュージアムに行くために一人で呉市に行って、そのときに呉市を散策していい街だなと思って、今こういうふうになっています。

司 会： 呉（出身等）のわけではないのに、呉への愛を語り出すと止まらない。

では、井口高校の三宅さんも教えてください。お願いします。

三 宅： 私は、まず広島の魅力について考えまして、その中で私が考えた広島の魅力というのが、原爆ドームや厳島神社という歴史とか伝統的な文化が魅力なんじゃないかなと感じました。その中で、そういう歴史的なものとか伝統的な文化というのは、若者にはちょっと疎遠になりがちというか、敷居が高いように感じまして、そこで私は、例えば伝統文化である神楽を音楽のフェスと融合させたりするなど、今ある若者文化と今ある広島魅力を掛け合わせて、新しい文化をつくったらいいんじゃないかなというふうに思いました。

司 会： 知事、一つ具体例が早くも出ましたが、神楽とフェスとかそういったものを掛け合わせってどう思われましたか。

湯 崎 知 事： いいですね。来年、神楽とオーケストラを組み合わせるというのはあるんですけど、どちらも伝統的文化ですよ。神楽って、特に広島神楽はロックとなじみ

そう、合いそうですね。神楽とロックっていいんじゃないかなという感じがします。今初めて気が付きましたけれど。

司 会： でもこれ、神楽掛けるでいくらでもバリエーションが、みんなのアイデアの分だけ広がりますので、それだけ神楽のポテンシャルがあるということですね。

湯 崎 知 事： そうですね。

司 会： もう二つもアイデアが出ましたね。ありがとうございます。

続いては、中越生徒会長、よろしくお願いします。

中 越： こちら「エンターテインメント的企画を増やす」というので、瀬戸内海を利用したマリンスポーツの活性化や、音楽フェスなどで背景を瀬戸内海のきれいな島々にして、広島と関連付けて楽しいことをもっと増やして、プライベートでも楽しいことがこんなにあるんだと思わせることでもっと長く住み続けるというのにつながると思いました。

司 会： では、その流れで黒帯、三井さん。教えてください。どうぞ。

三 井： 私は、「大学と企業が共同研究をする」と書いたんですけど、大学を卒業した人が働いている企業の人と現役大学生が共同で研究をすることによって、その企業に興味を持つことができるし、就職に対しての具体的なイメージが持てるので、広島に残って働きたいなと思えるんじゃないかなと考えました。

司 会： 知事、どうですか。大学と企業の共同研究。企業を知ってもらおうということですが、いかげしょうか。

湯 崎 知 事： そうですね。実は、叡啓大学が会場になっていますけれど、叡啓大学ってリアルな企業が抱えている今の課題を出してもらって、それを学生が参加して解決方法を考えるという、そういう授業をここはたくさんやっているんです。今の新しい教育ではそういうのがどんどん増えているし、企業にとっても新しいフレッシュな目でみてもらったり、専門知識を使った解決方法が出るし、学生のほうも三井さんにおっしゃっていただいたように企業のことを深く知ることが、リアルな仕事を知ることができますよね。もっともっとそういうのが増えるといいなと思います。

司 会： さて、続きまして、庄原格致の前杵さん、お願いしてもいいですか。

前 杵： 「交通網を整備する」というもので、インフラって日常生活の中で結構大事なもののじゃないですか。インフラが整備されてなかったら、たとえどんなに魅力的な街であっても長くは住みたくないなと個人的には思うんですね。広島の交通網で路面電車があるじゃないですか。路面電車は、地図を見たところ縦には通っているんですけど、南側は東西に通ってなくて使いづらそうだなと思ったのと、郊外を見てみたら、安芸高田市とか世羅町の近くには線路があるのに、人がいっぱいいる中心地には駅がなかったりして、少し不便そうなところが見受けられたので、交通網を整備したら、もっと若い人が来たいなと思うんじゃないかなと思いました。

司 会： 前杵さんがつくって、路線図をずっと見せてくれながら、「東西がなかなか」と

いうんですけど、知事、全て隈なくというのは色々なバランスで難しいんでしょうけれど、改善の余地とか、考える余地というのはいかがでしょうか。

湯崎知事： 昔からその話はずっとあるけど、実現してないということだと思いますね。今の路面電車の話ですよ。

司 会： なかなかトータルの費用のこともあるでしょうし。

湯崎知事： そうですね。東西に渡るのが難しいですよ、広島は。だからバスになっちゃうんですよ。自転車が便利という。これは公共交通じゃないね。

司 会： 宇都宮などは自転車であまぐちづくりをやったり。

湯崎知事： そうなんですよ。

司 会： そこもまた、研究対象に加えてください。ありがとうございます。

前 圭： ありがとうございます。

司 会： 続きまして、森松さん、お願いします。

森 松： 自分は、「広島で出来ることを増やす」と書いたんですけど、まず、何か広島が若者を増やすために、若者が仕事に就いたりするのに残る可能性が高くなるのが、「できることを増やす」じゃないかなと思いつきました。その理由は、自分がAI部に入っているから、まず最初に情報通信系ってどうなんだろうと思って、東京都と広島の就いてる人数を調べてみたら、東京都だと1万2,000人あったんですけど、広島だと6,600ぐらいしかなくて、2倍違って、広島と東京都で人口の違いはあるとしても、2倍違うってどうなんだろうと思って、これを書きました。

司 会： ほかに、森松さん、色々な業種ごとに全部調べてくれて、表をつくってくれたんですけど、どうしても東京との差で比較しがちなところがありますが、産業によって充実しているところ、追いつかないところがあるみたいなんですけど、その辺どう感じていらっしゃるでしょうか。

湯崎知事： 情報通信系というか、特に情報ですよ。これは、広島はずっと集積が薄かったわけなんです。ものづくり、ものづくりとって、ものづくりはすごく強いんですけど、いわゆるデジタル系の企業というのは少ないという課題もある。AIが来るまではそれでも別にあまり構わない、（デジタルソリューションは）買えばいいというところがあったんですけど、AIが入るようになって、その価値がすごく大きくなってきているので、これはデジタル系もしっかりと広島の中につくっていかないと、支払いがどんどん増えていくというふうになっていっているんですよ。

日本全体で見ても、日本からアメリカへの支払いというのがものすごく大きくなっていて、自動車とかを売って稼いでいるんですけど、その丸々稼いだ分ぐらいデジタル（関連の）の支払いをアメリカにしているんです、今。だから、日本全体がそもそも足りてないし、広島はさらに東京と比べると足りてないので、それを増やしていく取組というのが、実はサンドボックスとか、広島でそういうプロジェクトをやって、広島で色々なデジタルのソリューションをつくってもらおうとか、

広島にかかわってもらおうとか、そういう取組を今しているところですけど、おっしゃるとおりでちょっと足りてないんですよね。

司 会： 課題の共有としては非常に近いものがあったということで、ちょっと前に進むかもしれませんね。

では、馬場さん、お願いします。お待たせしました。

馬 場： 私は、「広島全体で育てられたと感じる取組を」ということで、私は福山市に住んでいるんですが、なかなか他の市町村を訪れることが少なくて、例えばこの広島市でも、17年間生きてきて今まで4回しか訪問したことがなくて、平和学習に来たときとカープ戦、カープを見に来たときとドラゴンフライズを見に来たときと、そして今日ということで、広島市って僕の中では平和とスポーツしかイメージがないんですよね。

でも、恐らく、先ほどの神楽もそうですし、多分知らないだけでもっと広島市の良さはいっぱいあると思うんです。広島県のほかの市もそうで、色々な良さがあると思うんですけど、それを全く知らないわけですよね。そういったことを小学校、中学校で教育じゃないですけど、伝えていくことで広島県の愛じゃないですけど、そういうのを学習させていって広島全体が故郷だと思えるような街にしていきたいと思います。

司 会： 馬場さんはここの思いがすごく強くて、広島というと広島市なんじゃなくて全体で、福山も全部で広島県なんだという誇りをもっと持ちたいと。県の施策にも出てきますよね、誇りという部分では。

湯 崎 知 事： そうですね。もちろん各地の色々な誇りというか、いいものってたくさんあって、ただ、馬場さんがおっしゃるように意外と、特に子供のときってあまり地域から外に出なかったりするので、それをお互いにもっともっとよく知る。もっと交流が色々な形であるとか、さっき言ったような色々な事業で取り上げられるとか、そうすると、自分の地域観というのがもっと生まれるかもしれないですね。

司 会： 馬場さんを定期的にみんなが呼び出すというのがいいかもしれない。こういう縁で友達になってもらって。

湯 崎 知 事： ちょっと今日来られる？みたいな。

司 会： 今日来られる？って。ちょっといいのあるよ。でも、逆も。馬場さん、飲食店をされているんですよね。

馬 場： そうですね。中華料理屋をやっています。

司 会： みんなでこっちに行くとかということで。

湯 崎 知 事： 今日の打ち上げは馬場さんちで。

司 会： でも、最近、家族が円安で悩んでいるって。

馬 場： ちょっと原材料が高騰していて、悩んでいます。

司 会： そんな話も行き来しながらやって、やっていただいて。色々な御意見ありがとうございました。

意見交換②（「A I についての取組や夢」）

司 会： さて、ここからはそれぞれの発表に移りたいと思うんですが、各学校ごとに自己紹介と、今取り組んでいる取組を教えてくださいと思います。

では、まずは井口高校のお二人から。今日は、前に出ていただきまして、発表していただきたいと思います。では、お願いします。（拍手）

では、滑さんと三宅さん、お願いします。

三 宅： お願いします。広島井口高校の三宅です。

滑 ： 滑です。

三 宅： よろしくをお願いします。

私たちは、電算機部という部活に所属しております。井口高校電算機部を少し紹介させてください。

井口高校電算機部は、つまりパソコン部ということです。私たち電算機部は3年生が8人、2年生が12人、1年生が5人で活動しています。活動内容はゲーム制作や動画編集、イラスト作成などパソコンにかかわることを主にしています。また、今年はロボットアイデア甲子園に参加するなど、外部の大会にも参加しています。

今回、AI部の活動についてなんですけど、どのようなAIを製作したいのかということと現在の進捗状況、これからの展望の三つに分けて説明していきたいと思います。

まず、どのようなAIを製作しているのかということなんですけど、私たちは、現在、ゴキブリの生息地を予測し、どこに対策をすればよいのか教えてくれるAIというものをつくりたいというふうに考えています。

例えば、このAIを使えば、隙間や食べかすの近くを検知して、その特徴に応じてアドバイスをしてくれるというふうなAIです。このAIは、家庭での利用以外にもレストランとか衛生面が厳しい場所とかで利用価値があるのではないかとというふうに考えています。

滑 ： 現在の進捗状況は、まずデータを取るところから始めていて、どういうデータを取るかと言われたら、まず論文などを読んで、ゴキブリの出やすい場所を探します。それをもとに部員が家で写真を撮って、今度はその撮った写真を使ってデータの仕分けを行います。その仕分けというのは、例えばこの写真だったら机という感じで、机は出にくい、冷蔵庫とかの隙間だったら出やすいというふうに仕分けて、それをもとにAIを製作します。

これからの展望は、AIの作成はまだ始まってないので、今からして、できたらその精度を上げて、実際に使えるかどうかを検証していくというのが今後の取組です。

三宅： では、その次に、私たち個人で広島をどうやったら盛り上げられるかというのを考えたので、そちらのほうも話していきたいと思います。

まず私は、先ほども話したんですけど、広島の魅力というものを最初に考えました。私が考えついたのは、歴史だったら原爆ドームや厳島神社、自然だったら瀬戸内海など、文化だったら神楽や熊野筆というものが魅力なのではないかなというふうに考えています。

その中でAIを具体的にどのように活用するかといいますと、例えば観光地のバーチャルツアーや画像認識によるガイド案内。厳島神社などを写真で撮ってもらったら、それを音声ガイドで案内してくれるというシステムなどをすると、より発信できるんじゃないかなというふうに考えています。

その中で、一番私が提案したいなと思ったのが、VRでの伝統文化体験というものです。AIの活用で伝統文化VR体験と言ったんですけど、その中で熊野筆の体験の動画をアニメーションでつくったので、見ていただきたいと思います。

(動画視聴)

このような感じで、上にどういう作業をしているのか、下にその作業の説明を加えることで、熊野筆の作業を分かってもらえるんじゃないかなというふうに考えました。

私は、結局何が言いたかったのかといいますと、広島魅力を、AIを活用していくことでより効果的に世界に発信することができるのではないかなということです。次は、滑君にバトンを渡したいと思います。

滑： 自分はAIを使って広島県を盛り上げたいと思いました。どうやって盛り上げるかといったら、自分だったら、こういうAIが欲しいなということを考えて、それが観光ガイドAIというものです。AIを使う人の趣味に合わせてどういう旅行をするかというプランを生成してもらおうという、ChatGPTのような感じのもので、旅行前や旅行の移動中などの時間に訪れる観光地の紹介をしてくれたら、移動中も楽しいという一石二鳥ができると思いました。

GPSと連動して、写真のスポット、インスタ映えをしそうな場所などを紹介したり、急に雨が降ったりすることもあると思いますから、そのときはすぐプランを変えられるようなものだったらいいなと思いました。

どういうふうなものかといったら、まず自分は呉が好きと先ほど言いましたから、呉を回りたいという呉市をぐるっと。これは、正直三次とか庄原とかどこでもよくて、あくまで自分は呉市が好きだからということで呉を具体例にしました。AIが、「どのような場所を回りたいですか」という細かいところを聞いてきます。そして、自分は呉の歴史とかが好きですから、「歴史を見ることができる場所に行ってみたいです」と言います。「それなら」という感じで、こういう感じの予定表を生成してもらえたらと思いました。こちらは自分が撮ってきた写真です。余白でス

ペースがもったいなかったので張らせてもらいました。

この予定表というのは、9時20分ぐらいに広島駅について、そこから9時半ぐらいに出発する快速列車に乗って移動を速やかに終わらせて、着いたらまず、てつのかじら館という場所に行ってそこで時間を使ってお腹もすかせて、れんが通りという商店街に行って昼ご飯を食べてもらい、一番の本題である大和ミュージアムに行って、呉の歴史や海軍の歴史を知ってもらって、呉湾艦船めぐりという自衛隊の護衛艦を海の上から遊覧船を使って間近で見られるものがあるので、それを使って楽しんでもらえたらと思いました。

最後は、5時50分に出発する快速に乗って帰りたいと思ったから、自由時間を設けて何をしてもいいよという感じで、ここをまたChatGPTというか、このAIを使って聞いたりするのもありだと思いました。

ほかにも写真認識システムでも、こういう写真を撮って、「ここはどういう場所ですか」という検索をかけたら、「歴史が見える丘という場所から撮った、かつて呉の海軍工廠だった現在のジャパンマリンユナイテッド呉工場です」という感じで教えてもらったりしたら、すぐにその場所がどういう場所かが分かりやすくていいと思いました。

最終的にできたらいいと思ったことは、旅行に来た観光客にこの街に住みたいと思わせて、実際に移住してもらうことです。そうすれば、広島県から若者が出ること減るだろうし、逆に県外から県内に入ってくる可能性もあると思ったからです。

以上、AIを使って呉市を盛り上げたいでした。

最後に知事に聞いてみたいことがあって、どうすれば呉市が広島市や宮島と同じぐらいの知名度を得られるのかということを知りたいと思います。

司 会： 呉観光大使みたいになっていますけれども。知事、この呉問題と掛けるAIというところも面白かったですけれど、いかがですか。この質問については。

湯 崎 知 事： 質問についてですか。知名度ですか。多分、知名度競争はしなくてもいいと思うんですよね。呉は呉にしかない魅力というのがあって、それをどれだけ磨いていくかということだと思うんです。広島市というか、広島という名前自体は世界の中で知らない人はないような名前なので、「実は呉って広島にあるんだよ」というふうに広島を使うだけでも、広島の知名度を活用して、その広島には、実は原爆ドームとかだけじゃなくて、この大和ミュージアムもあるんだとか、とてもすてきな坂の街なんだとか、そういうふうによく活用していったらいいんじゃないかなと思いますね。

滑 ： ありがとうございます。

司 会： そして、三宅さんから知事に聞きたいことがあるということ。

三 宅： ちょっとAIとはかけ離れちゃうんですけど、自分が理系の大学に行きたいと考えていまして、広島の大学に行きたいと思っているので、広島で理系の大学を探そうかなと色々調べてみたんですけど、文系の大学のほうがやっぱり多くて、理系

の大学を探すのが少し大変だったので、それについてどうお考えなのかなというのをちょっと聞いてみたいなと思いました。

湯崎知事： ちなみに理系のどんな学部に行きたい感じなんですか。

三宅： 行きたい学部は情報系とかを今一応考えています。それと医療系もちょっと考えています。

湯崎知事： なるほど。情報系か、医療というのは医学部ではなくて、ということ？

三宅： 自分がもし、医療系に行くんだったら、放射線技師になりたいなと考えています。

湯崎知事： なるほどね。広島県では、一応16大学は理系の学部がある大学はあるんです。調べてみたけどヒットしないというのは、ちょっと情報の出し方がまずいのかなという感じもしますが、情報系だったら、例えば広島市立大学とか広大もあるし、それこそ広島工業大学もあるんですけど。今度、福山市立大学にもできたり、もちろん何十とは無いかもしれないですけど、それなりにあるんじゃないかなと思います。

あと医療系も結構、実はたくさんあるので、そこも。放射線技師が具体的にあるかどうかというのは、どこにあるか分かりませんが、広大以外にも確かあったと思うので、ぜひ。というか、もっとよく情報提供するように頑張らないとなというふうに思いました。

三宅： ありがとうございます。

司会： こちらからは出していく。皆さんからするともっと調べるところで、どんどん到達点が歩み寄ってくるのかもしれませんが。

馬場さん、聞いてどうだったですか。かなりうなずいていましたけれど。

馬場： 一つ、質問いいですか。最初に、AIをつくっているとのことだったと思うんですけど、AIの精度を上げていきたいという話で、実際にどうやって上げるのかなと思って。人類の敵でしたっけ。精度を上げるのに、人類の敵がこういうところで見つかったからというデータを取っていくんですか。

司会： スケールが大分大きくなりましたね。AIの精度をどう高めるか。何か考えを持ち合わせている人は。滑さん、考えは。

滑： 自分はAI部に加盟していますけれど、良い考えを持ち合わせてないので、自分は特に分かりません。

司会： ないですね。知事もここまでになるとかなり範疇を超えてくるぐらいのスケールだと思うんですけど。

湯崎知事： AIの精度を上げるというのは、基本的にデータを増やすということなので、ひたすら出る場所を。でも、見たくないよね。できれば見たくないんだけど、精度を上げるためには見なきゃいけないという、この矛盾ですかね。

司会： 結構泥臭いところ。一足飛びの魔法はないということなんですね。

湯 崎 知 事：　そうですね。今のChatGPTとかも世界中のWebを勉強しまくって、ようやくあ
なっているわけですからね。人間ではとても無理な量のデータを取り込んでいるわ
けですけどね。たくさんデータを取り込めば賢くなるという、そういうことかなと
思います。

司　　会：　ちょっとそれは、若者にまたお願いしたいと思います。お二人、どうもありがと
うございました。（拍手）

では、続きましては、交替で広島工業大学高校のお二人、前に出てもらって発表
をお願いします。ポインターもどちらか持っていてお願いしたいと思います。

中　　越：　これから広島工業大学高等学校の発表を始めます。お願いします。

まず自己紹介から始めていきたいと思います。私、生徒会長、K-STEAM類型2年、
中越華音です。

三　　井：　私はK-STEAM類型2年、副会長をやっています三井雫です。よろしくお願いします。

まず学校紹介から始めさせていただきます。ここは、私たちがALCと呼んでいる
多機能図書館になっています。左側の奥が自習室でこちらが和室になっています。
その右下のところには後で御紹介させていただく、小さいロボットちゃんがいま
す。

ここは、私たちがCLLと呼んでいる場所なんですけど、私たちK-STEAM類型は普通
科なのですが、ものづくりを授業に取り入れているクラスになっています。この
CLLには、レーザーカッターや3Dプリンター、UVプリンターなどの機器が置いてあ
ります。

こちらが、それらを使った作品の例になっています。今回、この日のためにつ
くってきました、こちらアクリルスタンドになっています。これ、実は私と中越華
音がK-STEAMのKとSのポーズをしているアクリルスタンドになっていて、このア
クリルスタンドも工房に置いているレーザーカッターとUVプリンターを使ってつく
ることができます。

中　　越：　では、そんな広島工業大学高等学校に通っている私たちが普段しているAI活用に
ついてお話ししていきたいと思います。

まず、ChatGPTの活用についてです。私は生徒会長で、文化祭の閉会式原稿を
作成するときに、何から始めればいいのか分からなかったので、ChatGPTに下書きと
して「文化祭の閉会式について、生徒会長からの言葉を長めに、長めにつくって」
というふうに頼んだところ、こういうふうにすごい長い感じで出てきたので、ここ
からかいつまんで、何とか文化祭でしゃべりました。

三　　井：　次に、実際に授業中に使っている英語教材のEnglish Centralについての説明を
させていただきます。English Centralは、AIと実際にチャットをして学習能力を
高めていくことができます。こちらがEnglish CentralのAI、MiMiちゃんです。

中 越： ここからAIとの会話（チャット）の様子を再現していきたいと思います。

Do you think learning how to code easy? Why or why not?

三 井： I think learning how to code is not easy because it is many words and I can't learning and use.

中 越： That's great to know! let me prepare feedback for you.

という感じで、会話の最後にレポートとして自分がしゃべった文章を訂正してくれます。訂正した文章を見て正しい英文を学ぶことができ、いいと思います。

三 井： 訂正などが終わった後は、会話をしてくれたMiMiちゃんからのコメントが表示されます。こちら何て書いてあるのかはちょっと分からないんですけど、優しいですね。

中 越： 最初に説明したALCの中の右下にいたAIロボット、ラボちゃんについて簡単に説明させていただきたいと思います。

このラボちゃんの三つの主な性能を説明させていただくと、「見てくれる」。

三 井： 「あったかい」。

中 越： 「声に反応してくれる」というこの三つが主な性能となっています。では、実際にラボちゃんの動画を作成したのでご覧ください。

（動画視聴）

三 井： 動画を見ていただいたら分かるとおり、ラボちゃんが来たことによる校内の変化は、癒されにALCに行く人が増えたり、ALCに入ったら、本は一旦置いておいて、とりあえずラボちゃんを探しにいたり、ラボちゃんですら季節を感じたりすることがあります。動画ではトナカイの角を生やしてクリスマス仕様になっていて、めちゃかわいかったです。

これによつての気付きは、役に立たないことでも人を癒すという、逆に役に立つちゃうAIもいるんだなということが分かりました。

まとめです。このような日常を豊かにしてくれるAIは、自分の能力を高めるために活用していくことが重要なんじゃないかなと思いました。精神面で人を支えるAIも増えていったらうれしいなと思います。

中 越： そして、このまとめを踏まえて、開発中の面接AIについてお話ししていきます。まず、この面接AIをつくろうと思った理由についてですが、何度も何度も自分自身で練習することで面接能力を高めていくことができると思ったのと、先生との面接練習において、先生が内容も表情やしぐさも視線も全てを一度に見ることは難しいと考えたので、表情やしぐさの面だけでも面接練習の中で補助になればいいと思って、作成しようと思いました。

そして、この面接AIの理想像というのは、表情や視線、しぐさの3点においてAIからレーダーチャートという形式で評価をもらえるというのが、私たちのAIの理想

です。

三井： 今つくっている段階で、現状、このような感じで表情を読み取ることはできるようになったんですけど、ちゃんとした分析がまだできていないので、どんな顔をして（表情の読み取りが）ハッピーになってしまうという、とても素晴らしいAIができました。

中越・三井： 以上です。

中越： ありがとうございます。（拍手）

司会： ありがとうございます。何かこのお二人だと何が出てきてもハッピーでいいような気もするんですけど、AI生徒会長でしたっけ。

中越： はい。

司会： AIを駆使した生徒会長ぶりはいかがでした？

湯崎知事： 素晴らしい使い方です。この発表も途中までかなり笑いを取るところもあって、でも、最後は結びのところがすごい真剣で期待できるなという感じがしましたよね。

司会： そんなお二人から、知事に今日聞きたい質問があるということで。一つずつ。

中越： じゃあ、私から。AIに全く関係ないんですが、知事は、休日は何をしてお過ごしになられているんですか。

湯崎知事： 今、仕事をしています。

司会： 土曜ですもんね。

湯崎知事： それは冗談です。今は仕事をしているから休日ではないわけですけど、お休みの日は、子供が小さいころは子供を連れて何かしたり、子どもと何かやったりということが多かったんですけど、最近独立してあまり親の相手をしてくれなくなったので、最近は本を読んだり買い物に行ったりお掃除したり、そんなことが多いかな。

中越： ありがとうございます。

司会： 我々の年代になると、子供が離れていくとだんだん寂しくなってきた、ラボちゃんが欲しいかもしれませんね。

湯崎知事： そうですね。本当ね。ラボちゃんは反抗しないしね。

司会： ラボちゃんは反抗しないですもんね。三井さんも。

三井： 私、この前、三者面談で成績表が返ってきたんですよ。それを見たら、案の定、お母さんの視線が冷たくて。勉強ができないんですけど、お勧めの勉強法があったりしたらお聞きしたいな。

湯崎知事： お母さん、もっとちゃんと零ちゃんのことを見てあげてほしいですね。立派じゃないですか。

三 井： ありがとうございます。

湯 崎 知 事： それでいいんだよって。

三 井： 言っときます、母に。

湯 崎 知 事： 勉強は勉強でしっかりしてもらって。お勧めの勉強というか、自分の好きなものをまずたくさんやってみるというのがいいんじゃないですか。嫌いなところから始めると、苦手を克服しなきゃいけないという意識がよくあるじゃないですか、勉強すると。だけど、嫌なものばかりやっていたら嫌になるから、自分が好きなものとか得意なものをいっぱいやって、そうしたら、ちょっと自信も湧いてきたりとか。ほかのものもそれでよくなったりするじゃないですか。

三 井： なるほど。ありがとうございます。頑張ります。

司 会： やっぱり強みは英語ですか。

三 井： 実は、英語はあまりできなくて。私が得意なのは、理数のところに通っているくせに国語がめちゃくちゃ得意なので、日本人頑張ります。

司 会： じゃあ、強いところから伸ばして。

三 井： はい。

司 会： お二人、どうもありがとうございました。

中 越： ありがとうございます。

三 井： ありがとうございました。

司 会： では、続きましては、お待たせしました。庄原格致高校のお二人、発表と自己紹介をお願いしたいと思います。マイクとお一人がポインターを持って、お願いします。

前 奎： 前の2校の人のクオリティーがとても高かったのでちょっと心配なんですけど、頑張ろうと思います。

庄原格致高等学校の発表を始めます。お願いします。

森 松： お願いします。

前 奎： 私が2年の前奎狼太郎です。

森 松： 私が2年、森松愛琳です。

前 奎： 本題に入る前に、少しだけ格致高等学校について紹介をしようと思います。格致高等学校の格致という名前の由来は、「格物致知」という四字熟語から来ていて、この格物致知という四字熟語は、物事の本質をよく理解し、自分の知識を極限まで深めることという意味を持っています。

格致の特徴としては、自由な校風と地域に貢献できる人材の育成を目指しているというところがあって、自由な校風では生徒には自立と自律という二つの「じりつ」

が求められていて、そのため生徒主体の行事や活動が盛んで、例えば文化祭とか体育祭だけでなく、4月に新入生歓迎遠足があるんですけど、それでやるレクの内容も生徒会で決めたりしています。

地域に貢献できる人材の育成ということで、後で紹介するんですけど、総合的な探究の学習の時間で、地域のことを調べたり、地元の企業と協力した活動を行っています。

総合的な探究の時間では、1年生ではメタ認知、職業探究、創造力コンテストを行います。メタ認知は、自分を客観的に見て、分かりやすく言うとしたら、少し上の目線から自分を見て自分に関して振り返ってみるといったことを行いました。

創造力コンテストというのは、地域に貢献できる人材の育成にもつながるんですけど、庄原という地域をより良くするためにはどういうものが必要なのか、想像力を膨らませてそれをコンテスト形式で行いました。

今の2年生の活動はグループ探究で、「あったらいいなをカタチに」という題材で行いました。

そして3年生になると、2年生ではグループ探究だったものが個人探究になり、個人個人で探究を進めて最終的には論文作成に至るという活動内容になっています。

2年生のグループ探究では五つのグループに分かれていて、一つ目が格致高校改革グループで、例えば校則や行事をこのように変えたら、もっと良くなるのではないかという内容です。二つ目が庄原魅力化グループで、創造力コンテストともちょっと似たところがあるんですけど、庄原を魅力的にするにはどういうものが必要か、プランを作成した活動をしています。

三つ目が、私達ひろしまAI部で、AIを使って日常生活を便利にしたりというふうな活動を行っています。四つ目が小学生STEAM教室というもので、小学生に対してどういったことを行ったら良いかなど、今後の先生を目指したい人とかが行う活動です。その他は、色々な活動をしている人がいるので、ここでは省きます。

私たちひろしまAI部の探究内容では、AI部が12人いるんですけど、その12人が三つのグループに分かれて探究活動を行っています。一つ目のグループが「AIを学習に活用」、二つ目のグループが「AIで暮らしを便利に」、三つ目のグループが「AIを使って芸術や音楽などの創作活動の補助」といったものを目標にして活動を進めています。

森 松： 小グループ②「AIで暮らしを便利に」のメンバーが出したアイデアが、「自動販売機はAIで便利に」、「ごみをその地域に合わせて分別してくれる」、「スケジュールの自動作成」、「服のコーデを決めてくれる」の四つです。

このスライドは、先ほど紹介したアイデアの「スケジュールの自動作成」の資料になります。このスライドの写真を見てください。生成AIのChatGPTで、つい先日、格致高校であったクリスマスコンサートのスケジュールをChatGPTに作成してもらったものです。

まず、クリスマスコンサートがあることだけを伝えたと、日時から準備するものなどを教えてくれました。また、コンサートの日時も合わせて伝えたと、1週間前から当日までの準備やスケジュールを一応組み立ててくれました。さらに先ほどまでは取材者側、大人の立場に立ってのものだったので、生徒側であることを伝えたと、当日の生徒の動きや時間に沿った大まかな動きだけでなく、どのくらいに何をすればいいのかなどの具体的な内容も教えてくれました。

AIをもっと便利に使いたいと思った私たちが、もっと日常生活に近いところで生かしたいと考え、私たちの学校の購買近くにある自動販売機は、格致祭と呼ばれる学園祭、文化祭や体育祭などがあるたびに、欲しい飲み物がなくなっていることが多いので、その自動販売機をもっと便利にできないかを探求することにし、AIを自動販売機に活用したビジネスプランを考えることになりました。

最後に、私の所属している小グループ③の活動、「AIを使って創作活動の補助をしたい」というコンセプトです。グループ内の二人ともが音楽系の活動をしていたので、音楽系の創作活動の補助を中心に考えることになりました。そこで私が所属している邦楽部の作曲を生成AI、ChatGPTにしてもらうことになりました。

手順は、このスライドに書いてあるとおり、AIに作曲を指示、AIが作った曲を琴の音に変換というだけです。平調子のコードで明るい雰囲気になるように作曲してもらったものを実際にアレンジも加えながら弾いた音源があります。

(曲再生)

以上です。

今後は、成果発表会、校内、校外に向けて探究テーマの発表資料をまとめていきます。

これで格致高校の発表を終わります。御清聴ありがとうございました。(拍手)

司 会： ありがとうございます。音楽もすごかったですけど、三井さん、見てどうでした？音楽も含めて。

三 井： 急に音楽が流れてきたんですけど、私が思っていたのは一定のリズムに違う音が入っていく単調な感じになるのかなと思ったんですけど、間隔がそれぞれ違う上にきれいなメロディーになっていてすごいなと思いました。

司 会： ここまで来ているんですね。びっくりしましたね。

三 井： びっくりしました。

司 会： 知事、色々な取組をしている庄原格致なんですけど、どんなふうに聞かれましたか。

湯 崎 知 事： 今のAIってどんなことができるんだろうというのを、まず探究してもらっている感じですね。色々やってみると、こんなふうにも使えるんじゃないかと発想が広がっていくんじゃないかと思うので、とてもいい経験をしているんじゃないかなと思いました。

司 会：　そうですね。ごみの分別は本当に早くやってほしいなと思うぐらいです。

森松さんから、知事に質問があるということ。

森 松：　知事に、デジタル機器との付き合い方についてお聞きしたいんですけど、私は勉強のときスマホをできるだけ離して、自分の机の近くに置かないようにしています。私の友人の一人が、試験のときはデジタル機器に触れないってずっと嘆いていることがあって、そこでちょっと気になって、知事のご家庭ではデジタル機器とどのような付き合い方をされていますか。

湯崎知事：　基本的には任せているんですけど、上の子は高校生で下は中2なんですけれど、上の子はもう18歳にもなっているので、もう完全に任せています。森松さんみたいにちょっと離れてみたい、ちゃんと自律できているじゃないですか。自分を律する。さすが庄原格致高校。そういうことなんですけれど、その自律に任せるというのと、下の子はまだ中2なので、一応、アプリを何時間使えるとかゲームだったら何時間使えるという制限をかけて、あとは任せているという感じですね。何時以降は使えないとか。

森 松：　分かりました。ありがとうございました。

司 会：　前杵さんも質問があるということ。

前 杵：　はい。私たち高校生の身の周りにある分かりやすいAIというのは、ChatGPTとか絵を作ってくれるAIくらいしか、まだないと思うんですけど、今後は、私たちの日常生活にAIがどんなふうにかかわってくるのか、知事の意見を聞いてみたいと思います。

湯崎知事：　AI、実はもう多分、めちゃめちゃ使っていると思うんですよ。例えば、スマホに音声で指示したりするじゃないですか。あれはAIを使っているわけですよね。グーグルマップでどこそこに行きたいというふうに入れると、出てくるじゃないですか。あれもAIを使って出しているわけですよね。その中で、このルートでどんなところに、おしゃれなカフェに行きたいと言ったら、これもAIを使って出しているの、実はAIはすごく色々なところに入っていて、車の運転にももう入っているし。あれがAI？のような感じがするかもしれませんが、照明のコントロールとかエアコンのコントロールとか、そういうのもAIが今すごく入っていますから、実は色々なところで身近に知らない間に使っていると思うんですよ。

特に生成AIというのは、人とのインターフェースとして劇的に変わってきたものなので、生成AIなどを使って、例えば他のAIと組み合わせてコントロールする。生成AIは言葉でコントロールできるので、生成AIを通じて他のシステムをコントロールするとか、色々な使い方がこれからもっともっとあると思うし、例えば勉強なんかでも生成AIだったら、自分が苦手な、あるいは得意な分野の、例えば「古文の何とかについての例題をつくってくれ」みたいなのも使えたりするかもしれないですよ。

司 会：　多過ぎる課題も。これ使っちゃ駄目なんです。使い方も大事になってくるということですね。お二人、どうもありがとうございました。

前埜・森松： ありがとうございました。

司 会： それでは、最後の発表ということになります。福山の馬場洸希さん、よろしくお願いします。

馬 場： 広島大学附属福山高等学校、馬場洸希です。よろしくお願いします。

この度、三つのことについて話させていただきたいと思います。

一つ目に、私が学校でやっている部活動のコンピューター同好会について。二つ目に、もう一つの部活動のひろしまAI部について。三つ目に私がAIについて考えていることを話せたらいいなと思っています。

まず、コンピューター同好会の活動についてです。この部活を始めたきっかけは友人との会話からです。僕の友人のH君という人がいまして、H君は中学のころからプログラミングが得意で自分でWeb開発や自作ゲームをつくっていました。そのH君が今年の1月、「昔、コンピューター同好会っていうのがあったらしいんだけど、今はもうないのかな。この部に入れば、自作ゲームとか部でし放題になるんじゃないかな」と言ったのです。それに対して私は「じゃあ、つくればいいじゃん」。ということで部活を設立し、実際に私もその友人についていって部活に入りました。

そのとき顧問の先生から、あることを言われました。「競技プログラミングやってみない？」と。当時の私は競技プログラミングなんて知りません。「何それ？」という状態になりました。ここにいる皆さんも知っている人は少ないんじゃないかなと思います。

競技プログラミングというのは、ロボットをつくるとか、AIをつくるとかではなく、プログラミングを使って問題を解くことなんです。いかに正確で高速なコードを書くかというのを世界中の人と競い合っています。ただ、これだけの説明では分からないと思うので、ちょっと例題を出します。

例えば、整数 X が入力されます。一辺が X の立方体の面積を答えるプログラムを出してください。こういったとき、 $X \times X \times X$ で面積が出ます。これをPythonとかで書いてみると、こういった感じのプログラムを書けば、この問題に合ったプログラムが書けたということになります。あくまでこれは簡単な例で、解法を工夫するとかアルゴリズムを使うとか、そういうことをしないと解けない問題も多くあります。

そして、これまでの活動でパソコン甲子園2024という大会の本戦に出場することができました。パソコン甲子園とは、2003年から全国の高校生を対象にした会津大学主催の大会です。今年の予選は、全国506チームで行われて、本戦に31チームが選ばれ、選ばれた31チームで福島県の会津大学で戦ってきました。ここにいるのが私で、ちょっと隠れているのですが、相方が隣りにいます。相方は顔出しはやめてくれとのことだったので、この写真を使いました。惜しくも入賞はできなかったのですが、全国の高校生達と色々お話しすることもできて、すごく貴重な経験だったと思います。

この経験から、私は挑戦することの大切さを学びました。そして、今年度の挑戦はもう一つ、ひろしまAI部です。ひろしまAI部附属福山は私が部長となって、部員4人で色々アイデアを出し合って、発表会のためのテーマを設定しました。附属福山はオンライン会議の目線アイデアを解決する新発想のAIアイデアということで、オンライン会議のとき、例えばモニターを見たり手元の資料を見ると、どうしても目線が合わないという問題が発生するので、そういったものを解決しようと思いました。

そのためのアイデアとして今三つ出ています。

一つ目が、状況に応じた視線制御。今、エヌビディア社というところにアイコンタクトという技術があって、実際に目線が合うという技術はできているんですね。ただ、そのアイデアにプラスしようということで、既存の技術はずっと目線に向くような技術になっています。これを場面ごとにカスタマイズしようということで、例えば質問されたときに目線が向く。発言内容によって、視線の強さや方向を変える。そういった仕組みを、AIが文脈や会話内容を分析して、より人間らしいアイコンタクトを再現する仕組みです。

二つ目は感情表現機能の実装ということで、単に視線を合わせるだけではなく、アイコンタクトによって感情的なニュアンスを付加しようという機能です。

例えば、関心を持っている、疑問に思っている、納得しているというときの目線のアイコンタクトを伝えようということを考えていて、例えば、視線の強弱やタイミングを調整して、感情的な理解を促そうという感じです。

三つ目が集中度合いのサポートということで、学生さんだったり社員さんがどれだけ集中しているかというのを、視線データからAIが判断して、本人には、こういったときは集中できていたけど、こういったときは集中できてなかったねとか、先生などには、こういったときに集中できていない人が多かったですよといったデータを集計することで、授業中だったり研修中にどれだけ集中できていたかが把握でき、改善に役立てるというのを考えました。

最後に、私がAIについて考えていることを発表します。

AIは既に特定の分野、例えばチェスや将棋などのゲームだったり、音声認識、画像認識、自動運転などでは既に人間を超えています。さらに、AGIという汎用人工知能などが、近い将来、人間と同等のAIができるといわれています。少なくとも、私が大学生とか社会人になったころには、社会にAIが大きな影響を及ぼしていると考えられます。

こうした中で、私は自分自身に問いかけます。AIが進化し続ける社会で、自分はどうあるべきなのか。それはAIにできることは任せつつ、人間にしかできない価値を見つけ、発揮していくことだと考えます。AIと競うのではなく、AIと共存し、新しい可能性を切り開くことが私たちの役割だと考えます。

また、社会全体にとっても重要な問いがあります。この進化が社会全体の幸福につながるにはどうあるべきか。そのためにはAIの力を恐れるだけではなく、それを

正しく理解し、公平で持続可能な社会を築く仕組みを考えることが大切だと考えます。

最後に、広島県のリーダーとしての知事にお伺いしたいです。AIが進化し続ける未来において、広島がどういった社会を目指すべきだと考えますでしょうか。私達若い世代もその未来を共につくっていけるよう、考えや方向性を共有していただけるとうれしいです。

これで発表を終わります。ありがとうございました。（拍手）

司 会： いやあ、勉強になりました。三宅さん、どうでした？聞いて。

三 宅： AIがこれから日本にもたらす影響とか、そういうのを考えて向き合えるということがすごいなと思いました。

司 会： 知事にも最後のところで問い掛けがありましたけれども、そのあたりというのはいかがですか。

湯 崎 知 事： やはりAIに使われるんじゃないくてAIを使うということが大事なことですよね。我々が目指す社会というのは、どんな時代でも基本的にはそうだと思うんですけど、一人一人が幸せになるということだと思うんですよね。今、広島で言えば、広島に生まれ、育ち、住み、働いて良かったと心から思える広島県を目指そうと言っているんですけど、そのためにAIがどんなふうに使えるのかとか、その幸せというのも、また色々あるじゃないですか。仕事も幸せの一部だし、暮らしも幸せの一部、子育ても幸せの一部、色々なものが幸せにつながると思いますけれど、そういうものがAIに振り回されるんじゃないくて、うまく我々が活用して幸せにつなげられるようにするにはどうしたらいいのかなと、そういうことを考えていくことが大事じゃないかなと思います。

司 会： そして、馬場さん、実はもう一つ知事に聞きたいことがあると。

馬 場： さっき話したとおり広島市の交流を深めるための小学校だったり中学校の教育で、今やっていることとかこれからやっていく施策があれば、教えていただきたいです。

湯 崎 知 事： みんなが小学校のころやっていたんじゃないかと思うんですけど、今もやっていると思うんですけど、「山・海・島」体験活動という会があって、3泊4日だけ。やったでしょう。多分、海の辺にいる人は山に行ったり、山にいる人は海に行ったり、そういうところで県の色々な自分が住んでないところに行って何泊かして、体験学習するというのがあったんですけど、そういうようなこと。当時は県の事業としてやっていたんですけど、今は各市や町がそれを引き継いでやっているはずなんです。

ただ、中学になると、そういうのが途端になくなっちゃいますよね。だからもっと、確かに何か探究に行くみたいなね。今は探究学習という時間が中学でも高校でもあると思うんですけど、身の周りも大事だけど、ちょっと離れたところを探究してみるとか、そういうのもいいかもしれないですね。先生は大変になるんですけ

どね。

司 会： 庄原格致の前杵さんは、交通網とかあちこちへ行くのが好きということなんですけれど、どうですか。地域間交流でこんなことをやってみてほしいなとか、やってみたいなとか、何か考えていることはどうでしょうか。

前 杵： 地域間交流なら、それぞれ地域にある伝統について紹介したりして、面白いなとか、知りたいかなと思います。

司 会： 分かりました。

湯 崎 知 事： 姉妹校提携というのをやっていて、公立高校は必ず海外の学校と姉妹校があるでしょう。工大はあるかな。

中 越： あります。

湯 崎 知 事： 福山はある？

馬 場： 聞いたことないです。

湯 崎 知 事： ない？ないかもね。そういう海外の学校と姉妹校提携というのは色々やるんだけど、よく考えたら、県内の他の高校と姉妹校提携して、お互いの交流、伝統文化もあるかもしれないけれど、例えばバスケット部同士で試合に行くとか、琴の演奏会を一緒にやるとか、そういうのもあるかもしれないですね。

司 会： 学校ごと友達になっちゃうみたいなの。

湯 崎 知 事： そうそう。姉妹校は別に海外じゃなくてもいいなって、今ちょっと思ったんですけどね。

司 会： 話せばそういうのが出てくるものですね。これ、実現可能性もゼロじゃないでしょうし。

湯 崎 知 事： ゼロじゃないと思います。教育委員会が聞いていたらやってくれるかな、これ。

司 会： 皆さん同士でもやってみてください。

湯 崎 知 事： そうそうそう。学生というか、生徒のみんなが提案してくれるのもいいと思うんだよね。

司 会： これは一つ面白い展開になるかもしれないので。今後も皆さんもトライしてみてください。

馬場さん、ありがとうございました。

馬 場： ありがとうございました。

司 会： 皆さんの発表が終わったんですけど、中越さん、どうでした？ 色々な発表があって。同じ観点でAI部の活動とかやってきて、周りから聞いて改めて感じたこととかどうですか。

中 越： そうですね。私達が考えていたAIの活用方法とはまた違った目線のAIの活用方法

をたくさん知れて、良かったなと思います。

司 会： そして、滑さん、どうです？ やってきたことでも、こういう仲間の前と知事の前で発表したことによって自分の変化とかがあってどうでした？

滑： 最初はやっぱりこういう場に立つこと自体がまずないから、心配だったんですけど、意外とどうにかなるものです。

司 会： 本当、最初のガンブラの話からここまで来ましたものね。

知事、改めて。AI部の活動というのもあったんですけど、改めてこういう取組をやっている高校生たちから今日感じたことはどうだったでしょうか。

湯 崎 知 事： それぞれ、とても実用的なことを考えてくれていて、頼もしいなと思いました。本当に、結構楽しいでしょう、やってみて。どんどんそれを、もっともっと、これはAI部という形でやっていますが、そうじゃなく自分自身の中でも色々探究してもらおうと、また色々な発見があるんじゃないかなと思ったので、やっぱりいまどきの高校生って立派だなと。

司 会： 本当にそうですね。

湯 崎 知 事： 僕らのときは、こんなに深いことを考えなかったですよ。

司 会： これ、結局、AIのところフューチャーされますけど、今レポートとか発表を聞いていても、組み立てとか構成とか伝えたいこととか。

湯 崎 知 事： そのとおりなんです。これ、実は広島県で学びの変革ってずっとやっていて、彼らはそれを受け取っている、多分、小学校ぐらいから受け取っている世代なので、こんなに立派になってうれしいなって。

司 会： いや、本当、そうですね。馬場さん、ほめられましたよ。馬場さん、AIの取組をやっていましたが、まとめて話したことで自分で成長できたことってどうですか。

馬 場： この発表のために色々考えられたので、それはとても良かったなと。これを色々、今日の発表で考えたことがあるので、これは帰って、AI部の部員たちに色々伝えて、発表会に向けて色々頑張っていけたらいいなと思います。

司 会： ぜひ持ち帰ってください。ありがとうございます。

では知事、お時間が近付いてきたんですけども、今日はAIの向き合いを含めてお話しいただきましたが、それと、今高校生として大事にしてほしいこと。最後にメッセージを皆さんにお願いします。

湯 崎 知 事： そうですね。やっぱり高校生の時代はもう二度とないのでエンジョイしてほしいなと思うし、何か面白いこととか、自分が、興味があること。何でもいいと思うんですよ。別に勉強じゃなくてもいいわけだし、何か楽しいことをどんどん追求して行ってほしいと思います。

閉会

司 会： 分かりました。今日はどうもありがとうございました。

以上をもちまして、「湯崎知事と語ってみた」supported by 田宮パーツ、終了
します。皆さん、どうもありがとうございました。（拍手）